ずいそう

エチオピアで考えたこと

山　名　　良

私はJICA（国際協力機構）の長期専門家として，スリランカ，エチオピア等で建設機械訓練センタープロジェクトに従事してきた。特にエチオピアでは，建設の機械化に関する技術援助について考えさせられたことが多く，日本とは風土・文化が大きく違う他国での技術援助活動に参考になるように感じられるので紹介をしたい。

エチオピアは，伝承によるとその起源を旧約聖書の世界にまで溯ることが出来る。紀元前10世紀シェバの女王マケダがイスラエル国の王ソロモンの知恵を試そうとエルサレムを訪問した際に，二人の間に誕生したメネリク1世がエチオピア王国の創始者と言われている。イタリアに一時占領されていた時代があるとはいえ，エチオピアは西欧諸国の植民地になることはなく，1972年の社会主義革命による皇帝廃位まで王国の体裁を保ってきた。最後のハイレ・セラシェ皇帝は外交には多大の勢力を注いだが国内整備に投資をしてこなかった。革命後は，社会主義政権から現政権に変わる過程での内戦や一時併合していた北の隣国エリトリアとの独立戦争と国境紛争などにより，道路等の国内整備が全く進んでいなかった。結局そのツケが回ってきて，今では，世界で最も貧しくしかも道路密度が低い国家の一つとなってしまった。全国の主要都市を結ぶ道路以外には，自動車が通年通行できる道路は，ほとんどないというのが実態で，通年通行できる道路の延長が約3万4千km，その密度が約30 km/km^2，舗装道路の延長が約4千4百km，その道路までの平均距離が約16 kmという状況である。いわゆる道路地図は存在せず，1枚の全国地図とガイドブックさえあれば，日本の約3倍の国土を擁するエチオピア国内旅行が出来るのである。このようなわけで，エチオピアでは道路部門発展計画（1997～2007年）が策定され，道路の整備が推進されている。しかし，途上国の例に漏れず道路建設と維持管理の機械化に当たっては難題が多い。

エチオピアでは，財源不足から道路建設・維持管理用の建設機械は当然少ない。また，整備が必要な機械も多く見られる。現状では多量の石油でも発見されない限り，財政問題の早急な解決は期待できず建設機械の増加は困難である。

オペレーターとメカニックも質的，量的に不足しており，HIVの蔓延により数の減少が著しいとのことである。職業として魅力がなかったり，その国の社会事情や伝統により，エチオピアをはじめどこの途上国でもオペレーターとメカニックの社会的地位が低いこともその要因であろう。エチオピアの現状は，例えば訓練を受けるオペレーター候補生は文字を読解しないものもいるという現状である。メカニックについても，大卒者が油で手を汚さなければならない仕事に就くことがないので，ほとんどのメカニックは，工業高校や職業学校卒業生ということになる。その結果としてオペレーターやメカニックの養成に長時間と多額の費用がかかり訓練効率が悪くなる。確かに途上国におけるオペレーターやメカニックの作業環境は，非常に悪い。質の高いオペレーター等を多数育成するためには，よい人材を集め効率的な養成訓練をする必要がある。そのために，給与という待遇面からのアプローチだけではなく，作業環境の向上など，魅力ある職場環境を作り，オペレーターやメカニックの社会的地位を向上させることが求められていることを痛感した。

次に途上国の職業訓練上の課題として技術・技能達成目標が明確でない場合があることが挙げられる。エチオピアでも建設機械の運転操作や整備技能の国家標準が存在していない。このことは，どの程度の技能水準に到達すればよいのかわからないままに無駄な訓練をすることがあったり，必要な水準に達していないのにもかかわらず，自分達は出来ると信じ自惚れてしまうことにつながる。援助を受けるにあたって技術援助は必要ない，機材だけ供与してもらえば十分だとの過信に繋がり協力の妨げにもなる場合がある。各国毎の条件が異なり，国際的に共通に通用する標準を作ることは，困難なことではあろうが，目標が明確になることのメリットは，計り知れないと思われる。

エチオピアは，日本人には想像出来ないほど風土や伝統・文化が日本とは異なり，その発想も日本人のそれとは全く異なっているようである。プロジェクトの実施に対する考え方も違い，プロジェクトの目標達成にむけて両者の考え方の溝を埋めることは容易でなかっただけでなく，様々なことを考えさせられたエチオピアでの技術援助活動であった。

――やまな　りょう　社団法人日本建設機械化協会――